

## テモテへの手紙第一3章15－16節 「敬虔の奥義」

### 1A 生ける神の教会

1B 真理を伝える御霊

2B 私たちの間に住まわれる神

### 2A 神に似る者

1B キリストのところに來る者

2B 偉大な奥義

1C 肉における現れ

2C 御霊による義

3C 御使いたちの証言

4C 世界への宣教

5C 栄光への昇天

## 本文

テモテへの手紙第一 3 章を開いてください。午後礼拝で 3 章を一節ずつ見ますが、今朝は 15-16 節に注目します。「15 たとえ遅くなった場合でも、神の家でどのように行動すべきかを、あなたに知っておいてもらうためです。神の家とは、真理の柱と土台である、生ける神の教会のことです。16 だれもが認めるように、この敬虔の奥義は偉大です。「キリストは肉において現れ、霊において義とされ、御使いたちに見られ、諸国の民の間で宣べ伝えられ、世界中で信じられ、栄光のうちに上げられた。」」

テモテへの手紙、またテトスへの手紙には、「敬虔」という言葉が数多く出てきます。私たちが、神の恵みによって、信仰を通して救われたのですが、それには目的があり、敬虔に生きているためだということです。敬虔とは、「神のようになる」と考えればよいです。神を畏れて、神に似た者として歩むことを敬虔と言います。

### 1A 生ける神の教会 15

そして、聖書が教えているのは、「自分があがめているもの、拝んでいるもののように、自分もそうになっていく」ということです。自分の神が愛であれば、自分は愛のある人間となります。聖い神をあがめれば、聖い者となっていきます。その反対に、憎しみを抱いた神々をあがめていたら、憎悪に満たされることでしょう。無慈悲な神々をあがめていたら、無慈悲になっていきます。詩篇 115 篇で、偶像を拝む者たちについて、「これを造る者も、信頼する者もみな、これと同じ。」とあります(8 節)。私たちがあがめている方がまことの神であれば、この方の栄光を仰ぎ見ているのであれば、神の御霊の働きでその通り、似てくるのです。「Ⅱコリ 3:18 私たちはみな、覆いを取り除

かれた顔に、鏡のように主の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」

## 1B 真理を伝える御霊

ですから、まことの神を礼拝することは、敬虔への道そのものです。そこで、15 節、「**神の家とは、真理の柱と土台である、生ける神の教会のことです。**」とありますね。神の家には、真理の柱と土台が使われています。真理があって、初めてまことの神を礼拝できます。イエス様は、「ヨハ 4:23 神は霊ですから、神を礼拝する人は、御霊と真理によって礼拝しなければなりません。」と言われましたが、御霊によってのみならず、真理によって礼拝します。

みなさんは、他の宗教の礼拝、いや異端と呼ばれているところでも構いません、礼拝に出席されたことがあるでしょうか？私は、一度、イスラエルを旅行した時に、ヘブロンにある族長の墓を訪れたことがあります。そこに、アブラハム、イサク、ヤコブ、そしてリベカとレアが葬られています。そこには、ユダヤ教とイスラム教のどちらの礼拝所があります。同じところなのですが、仕切りを設けて、それぞれ分けています。そこで私は初めて、モスクの様子を眺めることができました。若い子たちがいました。そして歌をうたっています。教師、イマームと言いますが、何か説教をしています。その様子はさながら、ちょっと形式ばらない、キリスト教の礼拝と変わらないものでした。

そこで私は思いました。「真理によって礼拝することが、いかに大事なのか？」ということです。真理である神のことば、そしてイエスご自身が真理ですが、この方を土台にして、また柱にしている時に、私たちが、生ける神の家になっているということです。何か、歌の雰囲気がいいからとか、いいお話が聞けて良かったとか、一生懸命祈っているからとか、そういった敬虔のように見えるものが、必ずしも敬虔とは限らないのです。真理があってこそ、私たちはまことの礼拝者になることができます。そして、御霊がすべての真理に私たちを導いてくださいます。

## 2B 私たちの間に住まわれる神

私は、キリスト者の間にある礼拝をこよなく愛しています。それは、宇宙の中で、もっともエキサイティングなことです。なぜならば、宇宙を造られた神が、ご自分の名の栄光を、このような小さき者たちの間で現してくださるからです。私たちの間に住んで下さり、御霊によって、ご自身が生きておられることを証しておられるからです。これを不思議と言わずして、何と云えばよいでしょうか？

## 2A 神に似る者 16

### 1B キリストのところに来る者

そこでパウロは、こう言いました。「**だれもが認めるように、この敬虔の奥義は偉大です。**」敬虔の奥義ということです。これから読むと、よく分りますが、これは主イエス・キリストが行われたことを、ものすごい短い文でまとめたものです。ある人たちは、これはパウロの時代に、教会で歌われ

ていたもの、賛美の歌詞だったのではないかとされています。私たちは、賛美の中に「使徒信条」をそのまま歌う時がありますが、まさにそんな感じです。私たちが、イエスご自身を高らかにあがめるところに、私たちが神に似た者になるという奥義があります。キリストの内にあるのです。

奥義というのは、基本的に啓示です。神が示してくださらない限り、その人は知ることができません。その人は、知ったことを受け入れ、神の前にひれ伏します。だれがキリストを知り、そうでないかは、その人の努力次第ではありません。神の恵みが示されて、それをそのまま受け入れているかどうかです。

イエス様が、聖書を調べている宗教指導者たちに、次のように言われました。「ヨハ 5:39-40 あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。その聖書は、わたしについて証しているものです。それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません。」聖書がイエス様について語っているけれども、肝心の、イエス様のところに彼ら来ないということで、永遠のいのちを得られていないとされています。自分が何とかして知ろうとしていますが、ますますキリストから離れています。私たちは、示された真理に基づいて、キリストのところに行くのです。この方に会い、この方の前でひれ伏し、その声を聴き、従います。

## 2B 偉大な奥義

改めて読みます。「キリストは肉において現れ、霊において義とされ、御使いたちに見られ、諸国の民の間で宣べ伝えられ、世界中で信じられ、栄光のうちに上げられた。」

## 1C 肉における現れ

初めに、「キリストは肉において現れ」とあります。これは他のギリシア語の写本では、「神は肉において現れた」となっています。「ヨハ 1:14 ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。」天地万物を創造された方が、肉体を取られました。それは、前回学びましたが、私たちと神との架け橋、仲介者になるためでした。イエスは、完全に人となり、そして完全に神です。そのお一人の中に、神の性質を 100%持っており、人の性質を 100%持っておられました。こんなことを、頭の中で理解することは到底できません。しかし、そのことによって、私たちは神と一つになることができます。キリストにあって、私たちが肉にあって弱い存在なのに、神ご自身が住んでくださるのです。ここが敬虔の奥義の第一歩です。

前回お話ししましたが、キリストが神であることを受け入れて、人のようであったとするのも間違いであり、逆にイエスが人であったけれども、神のようであって、神ではなかったとするのも間違いです。それは、肉において現れたということを否定するものです。みなさん、これが単に、小難しい教理の話だと思わないでください。もし、イエスが神だけれども、人のようであった、実際は肉体を

取らなかったとしたらどうなるでしょうか？神という方が、みなさんから遠くはなれた存在になります。私たちは肉体をもった人です。しかし、人となってくださった仲介者がいないので、肉にある弱さを持ったままで神と交わることができなくなります。みなさんが、それぞれが肉体をもってここに集まってきました。キリストが肉体を取られたからこそ、私たちはこの方のいのちにあずかり、神にあずかっているのです。

それが、使徒たちが戦っていたグノーシス系の異端です。彼らは、交わること、集まることを軽視しました。なぜなら、知識があることが神の世界に入ることであると考えたからです。特別に選ばれた、霊的エリートのみがその世界を見ることができます。どんなに小さき者にも、いや小さき者に、キリストのところに來る者には、すべて同じ御霊が注がれるという恵みではなくなるのです。

そして、イエスは人であったけれども、神のようであったが神ではなかったとしてみましょ。どうなりますか？イエスが弱さに同情される方かもしれませんが、私たちを神に連れて行くことはできなくなりました。神ではないのですから。そこで、イエスのように神に従って、頑張りましょう！となります。これが、エホバの証人などの戒律主義が陥っているところ。自分たちの真面目さ、頑張り神の国に入ろうとしています。すべてしていることが人間的なことで、人間の知識や理解に頼っていくので、けれども神に到達したいと願っている、がんじがらめの律法主義になります。

## 2C 御霊による義

そして、「**霊において義とされ**」とあります。これは、御霊のことです。御霊によって、イエス様が義とされたということです。これは、イエス様が正しくなかったのが義とされたということではありません。イエスが、確かに正しい方であることが、御霊によって明らかにされるということです。聖霊によってマリアがみごもりました。そして主がヨルダン川でバプテスマを受けられた時に、聖霊が鳩のように下ってこられました。そこに天からの声がして、「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。(マタイ 3:17)」ということです。神から、確かにイエスがご自身の愛する子である、ご自身が喜んでいらっしゃる方なのだということです。聖霊によって、そのように明らかにされました。

その後すぐに、御霊によってイエス様は荒野に連れて行かれました。そして、40日飲まず食わずで、空腹を感じた時に悪魔が誘惑しました。しかし、その誘惑に打ち勝たれました。ここでも御霊によって主が義なる方であることが明らかにされました。それから、聖霊によって数々の奇跡を行われました。そして、十字架の道を歩まれました。「ヘブル 9:14 まして、キリストが傷のないご自分を、とこしえの御霊によって神にお献げになったその血は、どれだけ私たちの良心をきよめて死んだ行いから離れさせ、生ける神に仕える者にすることでしょうか。」御霊によって、キリストは血を流されました。

そして、何よりも、聖なる御霊によってイエス様は死者の中からよみがえられました。死者から

の復活によって、この方が言われたことが確かに正しいと証しされたのです。「ロマ 1:3-4 御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活により、力ある神の子として公に示された方、私たちの主イエス・キリストです。」このようにして、主は、聖霊によってお生まれになられたところから、よみがえりによって御霊によって義とされたのです。

ですから、主は、肉体を取られただけでなく、御霊によってご自分の義を現わしてくださっているのです。これが、敬虔の奥義です。私たちは、御霊によってキリストが内に住まわれて、そして義と認められています。「テトス 3:5-7 神は、私たちが行った義のわざによってではなく、ご自分のあわれみによって、聖霊による再生と刷新の洗いをもって、私たちを救ってくださいました。神はこの聖霊を、私たちの救い主イエス・キリストによって、私たちに豊かに注いでくださったのです。それは、私たちがキリストの恵みによって義と認められ、永遠のいのちの望みを抱く相続人となるためでした。」このようにして、主は、御霊によって私たちを生かして、神の義を身に着けるようにしてくださいました。

### 3C 御使いたちの証言

次に、「御使いたちに見られ」たとあります。御使いは、神に仕えている霊です。天において、神に仕えています。彼らが最も気になっていたのは何か、誰かと言いますと、イエス様だったのです。「I ペテ 1:12 彼らは、自分たちのためではなく、あなたがたのために奉仕しているのだという啓示を受けました。そして彼らが調べたことが今や、天から遣わされた聖霊により福音を語った人々を通して、あなたがたに告げ知らされたのです。御使いたちもそれをはっきり見たいと願っています。」

御使いは、イエス様が誕生された時に、いやその前から気になっていました。母マリアにその受胎を告知したのはガブリエルです。そして、イエス様がバプテスマを受けられた後、荒野で四十日、何も食べないでいて、それから悪魔の誘惑を受けられました。そこで御使いがイエス様に仕えていた、とあります(マルコ 1:13)。ゲッセマネの園で、イエス様が苦しみ悶えて祈られた時に、「ルカ 22:43 すると、御使いが天から現れて、イエスを力づけた。」とあります。そして、イエス様が墓から出てきた時に大地震が起こりましたが、そこには眩いばかりの衣を来た人が二人いました(ルカ 24:4)。イエス様がオリーブ山から昇天された時も、二人の人がいました。このように、天における焦点はイエスご自身であり、この方のなされる一つ一つのことだったのです。

御使いは今も、イエスを信じている者を助けてくれています。使徒たちのことを思い出してください。ペテロが牢に入れられている時に、その牢の鍵を開けて、外に出したのは御使いたちです。主のお働きにあずかっている者たちが、必要なところに、御使いが遣わされることがあるのです。

### 4C 世界への宣教

そして、「諸国の民の間で宣べ伝えられ、世界中で信じられ」とあります。ユダヤ人だけでなく諸

国の民であること。すべての民に伝えられたという事実です。言い換えれば、神は全ての人のためにキリストを遣わされたということです。神は全ての人を愛しておられます。キリストが死なれるまで神が愛された人で、その価値がない人は一人もいません。ここに敬虔の奥義がありますね。神はすべての人を救いたいと願われていて、ご自分のかたちに変えたいと願われているのです。私たちが、どんなに神から遠く離れていると思われても、主が近づいてくださいます。そして、変えることができるのです。

### 5C 栄光への昇天

そして、「**栄光のうちに上げられた**」とあります。これは、イエス様が昇天されたことです。イエス様は、ご自身が栄光のうちに戻られることを、何度となく語られました。「ヨハ 17:5 父よ、今、あなたご自身が御前でわたしの栄光を現してください。世界が始まる前に一緒に持っていたあの栄光を。」そして、これは天におられる父なる神が、キリスト・イエスであれば受け入れるということを示しています。イエス様が、「ヨハ 16:10 義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなるからです。」と言われました。天には、イエス様と同じ義を持っていなければ入ることができません。

しかし、キリストが肉を取って下さり、しかも、その肉において処罰を身代わりに受けて下さり、そしてよみがえって下さいました。そして、ご自身が御霊によって私たちの内に住んで下さっています。ですから、父が私たちを見る時は、キリストにあって見ておられます。それで、私たちを天に受け入れることができるのです。私たちでは決して天に届くことはないのですが、キリストにあってすでに天の座に着くようにしておられるのです。そして主が戻って来られる時は、栄光のからだに変えて下さいます。

キリストは、他の宗教の創始者と違います。この方は道を教えただけでなく、道そのものになっておられます。ですから、イエス様が私たちの内で生きることによって、私たちは敬虔に生きることが赦されています。仏陀は良いことを教えました。しかし、それを守る力は与えません。ムハンマドも同じです。すべて自分で何とかしないとイケないのです。ところが、イエス様は教えるだけでなく、その教えにかなった歩みをする力をくださったのです。敬虔の奥義です。だれにも、この恵みを奪い取ることがありませんように。イエス様にだけ聖めがあることを忘れることがないように。